

「シュガー、ミルク、スプーン、カップ、コーヒー、ダーリン」

作 F Oペレイラ宏一朗

ある、唐突な、愛の話。

登場人物

男 カフェの店長

女 男の初恋の女性と同じ見た目。

《メモ》

- ・これは近未来の話として捉えていい。
- ・宇宙人は、象徴的な存在であるが、対象の男も、日本人の象徴である。
- ・カフェ以外の空間を舞台上に作る必要はない。が、存在していることを忘れないで欲しい。
- ・宇宙人を演じるということは、人間を演じることと何も変わらないと思う。
- ・タイトルはコーヒーを飲む手順である。
- ・この二人の間に生まれるモノが愛と呼べるかはわからない。
- ・各登場人物の年齢設定は、変化させることで違った意味を持つと思われる。
- ・この戯曲は、普遍的なものを扱っている。
- ・「ー」はあえて除外されているが、そのように演じる必要はない。

【開演前】（※ 開演前については必ずしも実際に行く必要はない。）

雨が降っている。

舞台上か、観客の目につくところに緑色のスライムがある。

開演直前、男が傘を差しながらやって来る。

スライムに近づく。

上空を飛行機が飛んでいく。

ゆっくりと暗転。

【開演】

梅雨の夜。路地を抜けたところにあるカフェ。外は雨。

机が一つ。カフェの机にあるであろう物たちが置いてある。

机の側には二脚椅子がある。一つに女は座っている。

男は女に背を向けて立っている。コーヒーをいれている。

男、カップを持って移動し、それを女の前に置く。

男 お待たせしました。

女 ……？

男 それ。

女 え。

男 だから、それ。

女 あ、ああ。これか。

男 そうそう。

女 これか。

男 やっぱり、初めて見る？

女 はじめて、だ。

男 ならばびっくりするよね。まあ、飲んでみてよ。

女 うん。・・・このカップがそんなにおいしいものか。

男 ・・・え？

女 なかなか固いな。

男 あ、違うよ。

女 え？

男 その、中の物がね。

女 ああ、この液体が。

男 そうそう。

女 へー。

男 そんなに珍しいかな。

女 うん。私たちはこういうものを飲まないから。

男 そうなんだ。

女 器に入ってる時点で珍しい。

女、近づかず臭いを確認する。

女 香りは、悪くない。

男 そうでしょ。挽き立てだしね。

女 色は、、果てしないな。

男 は？

女 黒いな。

男 あ、ああ。

女 宇宙みたいだ。

男 はは、確かにそうかもね。

女 飲んでいいのか？

男 どうぞどうぞ。良い豆だからね、味は保証するよ。

間。

女 なあ。

男 なに？

女 これはどうやって飲むんだ？

男 え？

女 飲み方があるんじゃないのか？

男 あ、そっかそっか。

女 温度的に八十度もあるものを一気に飲むわけにはいかない。
男 そういう感覚あるんだ。

女 感覚というより、分析の方が近いかもしれないな。私たちには規定の温度以上のものは受け入れられないような気管ができています。まあ規定の温度以下もしかりだが。

男 それは僕らも一緒だよ。

女 じゃあこれはどうやって飲むんだ？

男 冷ましたりとか、ちよつとずつ飲むの。

女 ふうん。じゃあこのテーブルの上にある小包はなんだ？あとこの小瓶と。

男 それは砂糖で、こっちはミルク。

女 これをどうするんだ。

男 入れるんだよ。砂糖は甘みを加えられるし、ミルクは苦みを抑えたり、ホットの場合は温度を下げる役割を持つてるんだ。

女 なるほど。

女、砂糖とミルクをドバドバと入れる。

男 あああ、先に砂糖を入れないと溶けないからね。あときちんと好みにあつた分量を入れるんだよ。
女 そうなのか。しかし好みというものはないんだ。

男 ああ、そっか。まあ、じゃあ飲んでみたらいいよ。

女 うん。

女、コーヒーを机に置いたまま顔を近づけて飲んでみようとする。

男 ああ、その取っ手、

女 うん？

男 そこを持って、それを顔に近づけて、口から飲むの。

女 ふうん。

女、コーヒーを飲む。

男 どう？

女 甘い牛乳だな。

男 やっぱり。

女 臭いもなくなったな。

男 まあ入れすぎだよ。

女 置いてあると全部入れたくなるものじゃないか。

男 ごめんごめん。先に言えばよかったかな。僕も君がどんな風に飲むのか知らなかったし・・・あ、あと混ぜてないよね？

女 うん？

男 そのスプーンで混ぜるんだよ。

女 ほう。

男 一度、そうして飲んでみてよ。

女、コーヒーを混ぜてから再度飲む。

男 どう？

女 さつきとは違った味を感じるな。

男 でしょ。どんな感じ？初コーヒーの感想は。

女 悪くない。でも難しいな。

男 え？

女 まず分量を決めた砂糖を入れて、分量を決めた牛乳を入れて、食器でかき混ぜて、器を持って、飲む。手順がありすぎる。そこまで苦勞して飲むほどのものなのか。

男 ああ、まあ、そう言われてみるとね。でも慣れるとそうでもないよ。

女 ふうん。

男 そういう自分の好みで味わる飲み物って、最近は少なくなってるんだ。高機能食品とかも増えてるし、今じゃ機械がなんでもやってくれるからね。悪く言えばアナログだけど、それが好きって人もやっぱりいるんだ。で、これを作って出すのが僕の仕事ね。

女 立派だな。

男 そう？

女 うん。

男 そんなことはじめて言われたよ。

女 そうなのか。

男 今どき喫茶店って流行らないし、趣味の範囲って思われること多いからね。

女 ふうん。

男 この辺りも前はたくさんあったんだけどね。

女 潰れたのか。

男 うん。まあやっぱり時代の流れに負けてね。・・・それに、立地がいいところは国が買い取っちゃうんだ。いつまで続けられるかわからないって思ってた人にはむしろありがたかったんだろうね。ここはまあ路地裏だからまだ大丈夫だけど。それでもたまにそういう通達書？みたいなもの来るんだ。

女、コーヒーを飲む。

男 いや、でもやっててよかったよ。君みたいなお客さんが来てくれるんだから。って言っても、連れてきたのは僕だけだ。

女 付いてきたのは私だ。

男 まあそうだけどね。嬉しいよ。あ、そのコーヒーは奢りだから、遠慮なく飲んでね。

女 いいのか？

男 いいよいいよ。お金も持ってないんでしょ？

女 かたじけない。

男 (笑)どこで覚えたのそんな言葉。

女 おまえの頭の中だ。

男 え？

女 おまえの記憶の中から得た情報を元に、私の意思に適切な言葉を選んで発している。

男・・・

女 おかしかったか？

男 おかしいって言うか、違和感かな。西村さんはそんなこと言わなそうだったから。

女 どういうことだ？

男 いや、その姿、西村さんでしょ？

女 この体は、おまえの記憶の中で一番鮮明に記憶されている人物の姿なだけで、その人物になつて
るわけではないんだ。

男・・・そうなんだ。

女 手を出してみろ。

男 え？

女 いいから。

男 こう？

男、手を差し出す。

女、男の手に触れる。

女 なるほど。「ありがとう」。こう言えばよかったんだな。

男 え？

女 今、おまえの記憶から再度適切な言葉を選んでみた。

男 へえ。

女 記憶とは膨大な情報データだからな。全部を把握しきれてないんだ。

男は女に感心している。

女 なんだ。

男 いや、あらためて、宇宙人なんだなって。

女 どういうことだ？

男 その、触って読み取るとか。凄いなって。

女 まあ地球人にはないみたいだな。

男 うん。僕らとは全然違うよ。

女 私としては割と上手く真似られていると思っただがな。

男 あ、ううん、もちろん、そっくりだけど、でも、やっぱり雰囲気とか、その能力とか。色々と違
うなって。

女 そうか。地球人というのは難しいな。

男、笑う。

女 どうして笑う。

男 いや、なんだか、面白いなって。

女 面白い？

男 うん。あ、別にバカにしてるわけじゃないけど、このやりとりが？

女 うん？

男 やっぱり映画みたいっていうか、漫画みたいっていうか、とにかく現実味がなくて。面白いつていうか、感動っていうか。

女 私としても地球の人間とこうして話せていることは感慨深いぞ。まさか不時着することになるとは思ってもみなかったからな。いやしかし、最初に温厚な人間のおまえに接触できたのは不幸中の幸いだな。

男 どうして？

女 今まで我々は地球人に接触したことがなかった。それこそ未知の世界だ。実験材料にでもされるんじゃないかと怖かったよ。

男 宇宙人にもそういう感覚あるんだね。

女 当たり前だ。人をなんだと思ってる。

男 僕も君を病院の前で見つけたときはどうしようかと思ったよ。

女、コーヒーを飲む。

少しの間。

男は窓の方に目をやる。雨が降っている。

男 今日はどうやまないかもしれないね。

女 そうか。

男 最近多いんだよね、雨。この間は一ヶ月近く降ってたし。

女 確かに、雲で覆われてたな。

男 宇宙から見えて？

女 うん。

男 おお。

女 しかし、地球の雨は、苦手だな。

男 え？

女 こう不純物が多いとな。

男 ああ、そうなんだ。

女 うむ。性質的には我々の身体の仕組みと少し似ているのだが、似ているだけに、混ざりやすく、特殊な反応を起こしてしまう。

男 あんまりよくないの？

女 うん。

男 そうなんだ。・・・昔はもつと透明な雨だったんだよ。いつからだだったかな。あんな灰色の雨が降るようになったの。ちゃんと覚えてないんだけど、ニュースにもなって。あ、でも身体には無害だと言ってたよ。

女 無害なものなんてこの世界にはないと思うがな。

男 まあ、ね。でも、ニュースじゃほんとにわずかなものだって。

女 それは本当か？

男 うん。

女・・・

男 どうかした？

女 いや、何はともあれ、あのとき傘を差しだしてくれて助かったよ。

男 ああ。

男、笑う。

女 何か面白いか？

男 いや、自分でもどうしてそんなことしたんだろうって。

女 何も考えてなかったのか？

男 まったく。

女 おいおい。私が言うのもなんだが、どんな危険があるかもわからないんだぞ。

男 まあ、そうだよな。なんていうか、最後ぐらいいいかなって。

女 うん？

男 いや、その、やっぱり心のどこかでありえないって思ってたんだよね。そりゃ驚いたよ。病院を出たら急に液体が喋ってきて、でも、そう、好奇心かな。昔から好奇心だけは旺盛な子供って言われてて。

男、笑う。

女 無鉄砲、と言うやつだな。

男 そうそう。あと猪突猛進とかね。でも、それが今じゃこうしてうちの店でコーヒー飲んでるんだから。わかんないもんだね、人生。

女 おまえはやはり、我々がイメージしていた地球人とは違うな。

男 え？

女 もっと血の気が多い、恐ろしいものだと思っていた。

男 まあ、変わってるって言われるよ。

女 そうか。

男 あ、寒くない？空調の調節が壊れててさ。毛布とかあるけど。

女 大丈夫。我々には適温だ。

男 へえ。

女 どんなものなんだ？

男 え？

女 その、おまえの、いや、地球人の我々のイメージというのは。

男 ああ、いや、色々だよ。

女 漫画や映画か。

男 うん、ドラえもんとか、

女 不二子藤夫だな。

男 そういうのは知ってるんだね。

女 おまえの記憶から情報を得た。

男 そっかそっか。でもあれだね、最初からわかってるわけじゃないんだね。

女 うん？

男 いや、僕の考えてることがわかるなら、わざわざ説明することもないのにつて。次に言うことだつてわかりそうだけど。

女 いわゆるエスパーというわけじゃないからな。あくまでも私は記憶を得ただけで、思考を得たわけじゃないんだ。記憶を持っていても、思考がわからなければどういう順序でその考えに行き着

男 いたかは理解できないだろ。
難しいなあ。

女 例えば、箇条書きのようなものだ。いくつかの記憶を断続的に書き出しても、それらを情報として抱えていても、それぞれがどのように結びついているかは書いた本人にしかわからない、ということだ。

男 ああ、なるほど。

女 そのため、喋り方がこうなっている、ということだ。

男 へえー。

女 やはりおかしいか？

男 うん、まあ、あ、でも、逆にそれが「ぼい」んだよね。

女 ふうん。

男 ねえ、他にはどんなことができるの？

女 うん？

男 ほら、光線を出したり、一瞬で移動したりとか。

女 私をなんだと思っっているんだ。

男 宇宙人。

女 まあそうなんだが・・・だからといってなんでもできるわけではない。

男 記憶を読み取ったり変身できるだけでも凄くと思うけどね。

女 できることはそれぐらいだ。

男 あ、じゃあ、例えば、西村さん以外にも変身することができるの？

女 できなくはない。

男 え、凄い。やってみてよ。

女 え？

男 今。

女 今？

男 うん。

女 ・・・・それはできない。

男 え？なんで？

女 我々にも色々都合があるんだ。

男 都合？

女 細かいことは気にするな。

男 う、うん。

女 この体は私の体の分子結合を変更し、表現している。それには体力を使うからな。短時間に何度もできないんだ。

男 へえ。

女 それに、この体はおまえの記憶に鮮明に残っていたから細かく真似ることはできているが、曖昧に覚えているモノはおかしな容姿になる。

男 そうなんだ。難しいんだね。

女 まあな。

男 あ、じゃあ、・・・僕の身体を変えたりとかはできるの？

女 それもできなくはない。地球人の身体もいくつかの分子で作られているからな。ただ、うまくいかはわからない。

男 どうして？
女 やったことがないからだ。だから保証はできない。
男 そっか……。

間。

女 この女と同じ容姿になりたいのか？
男 え？
女 一番鮮明に記憶に残ってたんだ。そう考えていてもおかしくはないだろ。
男 僕が、西村さんに？
女 違うのか？
男 ち、違うよ。そんな、なりたい、なんて、
女 じゃあなんだ？
男 え？
女 どうしてこの女が鮮明に残っていたんだ。
男 いや、それは、
女 なんだ？
男 そんなの、僕の記憶を見たんでしょ？わざわざ言わなくてもだいたいわかりそうなものだけど。
女 わからん。記憶には感情や思考はないからな。
男 そうなの？
女 記憶と感情は別物だぞ。大脳皮質に存在している記憶と呼ばれる思考、前頭葉で起きている感情、
男 これらは同時に存在することはない。
男 そうなんだ。
女 おまえが昔学校で習ったものだぞ。
男 覚えてないよ。じゃあ、腹が立った記憶とかは？
女 そういう行動をしたという記憶であって、感情ではない。あのときこんなことを思っていたな、
男 というのは実際は現在おまえにあるものなんだ。
男 へえ。
女 それに、地球人の感情というのは複雑だ。
男 え、どういこと？
女 我々にはその前頭葉と呼ばれるものがないんだ。
男 え、感情がないの？
女 ないわけではないのだと思うが、地球人の思うような感情というものはない。そのため、難しい。
男 そうなんだ。

少しの間。

男 じゃあ、君たちは、恋とかしないの？
女 恋？
男 そう、恋。
女 恋とは、なんだ。
男 え、そこから？

女 わからん。おまえの記憶上でも、恋というのはかなり曖昧だ。

男 ええ、そうなのかな。

女 恋とはなんだ。

男 恋って言うのは、その、胸が苦しくなったり、

女 病気か？

男 ああ、違う。その、ポーツとしたり、他に何も手がつかなくなったり、

女 鬱病か？

男 ああ、それも違う。え、難しいな。なんて言うのかな、何をしてても、その人のことが気になつて仕方がないというか、憧れ？強い憧れというか、愛みたいな、

女 愛？また抽象的なものだな。

男 ええっと・・・。

女 よくわからんな。

男 言葉で上手く説明できないよ。

女 曖昧なモノというのによくわかった。

男 ごめん。

女 謝ることはない。こちらこそ疑問ばかりぶつけて申し訳ない。曖昧なものなんて、この世界にはたくさんあるからな。しかしやはり、私は、我々は、恋というモノはしたことがないな。

女、コーヒーを飲む。

女 冷めてきたな。

男 ああ、新しいのいれる？

女 いや、まだ残っているから大丈夫だ。

男 そう？美味しくなかったら新しいの淹れるのに。

女 おまえがせっかくだからいれてくれたものだ。最後まで味わう。

男 そう。

女 それに、これはこれで美味しい。

少しの間。

女 この女に、恋をしているのか？

男 え？

女 違うのか？

男 いや、違うことないけど、

女 そうか。やはりな。

男 え、どうして急に、

女 先の会話から、そうなのかなと思った。

男 いろいろ凄いな。・・・うん、そうだよ。好きだった。

女 好きか。

男 初恋だったんだ。

女 はじめての恋か。

男 うん。

女 それは普通の恋とは違うのか？
男 違うことはないけど、やっぱり特別な。
女 ふうん。よくわからないな。

雨が降っている。

男 うん、中学から大学まで、ずっと好きだった。
女 想いを伝えれば良かっただろうに。
男 それができれば一番良かったんだけどね。
女 どうして伝えなかったんだ。
男 なんてかな。

男、胸の辺りを押さえはじめる。

男 その、憧れが強すぎたって言うのかな。西村さんはずっと特別で、他の女の子と付き合ったりはしたけど、
女 みっちゃんときとみんなだ。
男 う、うん。言わなくていいよ。
女 なぜだ？

男 恥ずかしいよ。
女 恥か？じゃあおまえがみっちゃんに言った「ずっと二人でいようね。」とか、きとみんなに言った「君だけ」という言葉はなんだったんだ？

男 ああ、ああ、違う、そんな、恥ってわけじゃないんだけど・・・うん、その二人とも付き合ったりしたけど、でも西村さんだけはずっと好きだったんだ。

女 私に言わせてもらえば、どれも同じような外見に同じような生殖機能を持っていて、そう差異は感じられないがな。

男 同じじゃないんだよ。外見とかじゃなくて。ない？そういう経験。

女 わからんな。地球人特有のものなんじゃないか。

男 そうかな・・・そうなのかな・・・

男、息づかいが荒くなる。

女 大丈夫か、心拍数が上がっているぞ。

男 ああ、大丈夫だよ。大丈夫。

男、薬を飲む。

女、コーヒーを飲む。

女 恋か。教えて欲しいものだな。

男 え？

女 なかなか合点がいかない。内面のように抽象的で不確かなもの、確実性がないものに惹かれるという経験が私にはないのでな。

男 でも、僕のことは温厚な人間って判断したでしょ？それは内面で判断したんじゃないの？
女 それはおまえの分泌物や体温などの変化を見て、危険性がないと判断したからだ。

男 そう。

女 それに、会ったばかりの人間の内面を判断するなんて地球人にも難しいんじゃないのか？

男 まあ、そうだけど・・・。

女 そうだな、例えば、おまえが恋をしているときに私が触れることができれば、読み取ることができるとは思えないな。どうだろう。今すぐ恋を試してみてくれないか。

男 え？

女 難しいか。

男 それは、その、こっちにも事情があるというか。

女 そうか。

男 うん・・・。

間。

雨が降っている。

男 あの、今更なんだけど・・・聞いていいかな。

女 なんだ。

男 その・・・君は何しに地球に来たの？

女 うん？

男 侵略とか、地球人を誘拐するためとか。いろいろあるじゃん。

女 ああ、それもまたイメージだな。

男 違うの？

女 ああ、それは、地球人を調査するためだな。

男 調査？

女 うん。地球人を調査し、文化レベルや好戦的かどうか、などを調べ報告するんだ。

男 なんのために？

女 我々が移住できるかどうかだ。

男 移住？

女 そう。我々にとって移住が可能な星だと分かったら、移住作戦を開始する。私はその先発調査員だ。今のところ、まあほとんど調査できてないが、これから時間をかけて調査していこうと思う。

男 もし危険だったら？侵略するかもしれないってこと？

女 そうかもしれないな。

男 ・・・地球人を殺すの？

女 ん？なぜだ？

男 だって、侵略でしょ。

女 わざわざそんな野蛮で不利益なことを行なう必要がないだろう。地球の通信システムをハッキングし掌握、首脳部を麻痺させれば、無駄に血を流すことなくきれいに侵略できるんじゃないかな。

男 それは野蛮じゃないの。

女 地球の歴史を考えたら、こんなものを野蛮と呼べるか？そんなものよりもかなり合理的なはずだ。ほとんどの人間が気づくことなく、主導権が入れ替わっているさ。

男 ・・・。

男、不意に笑い出す。

女 何か面白かったか？

男 いや、ううん、西村さんが侵略している姿を想像したら、なんかどうでもよくなって。

女 それで笑ったのか。

男 そう。別にいいやって意味で。あと、怖すぎて逆に？

女 逆に？

男 昔からよく言うんだよ。怖いときや、辛いときこそ笑えって。

女 笑いというのは奥が深いんだな。

男、笑う。

男 そうだね。

女 おまえはよく笑うな。

男、一瞬止まる。

女 どうした？

男 いや・・・ううん、昔、同じようなことを西村さんに言われたなって思っ

女 ふうん。

男・・・「原田くんって、いつも笑ってるよね。」って。

男には今この瞬間が何か特別な時間のように感じる。

雨が降っている。

女 コーヒーをもう一杯いただいてもいいか。

男 あ、ああ。うん。

男、再びコーヒーをいれる。

飛行機が雨の中を飛んでいく。

男、コーヒーを持ってくる。

男 お待たせしました。

女 うん。ありがとう。

女、ぎこちなくではあるが、砂糖とミルクを適量入れ、スプーンでかき混ぜる。

男 ねえ、君たちはみんなあんな見た目なの？

女 うん？

男 だって液体、スライムみたいだったし。

女 スライムか。
男 うん。ほら、なんか、緑色の、ドロっとしてて。
女 私としてはアメーバの方が似ていると思うんだけどな。
男 どっちでも一緒だよ。
女 そうなのか。うん、みんな同じような見た目だ。
男 へえ。でもそれぞれの違いはわかるんだ。
女 まあなあ。
男 どうやって決めるものなの？
女 うん？
男 結婚とか。さつき恋とかないって言ってたけど、どうやってしたりする？お見合いみたいな感じ？
女 我々には婚姻というものはないが、つまり繁殖のことを言ってるのか？
男 ああ、うーん・・・うん。
女 我々は繁殖する個体というのは決まっっていて、その個体、地球人で言う母親から基本的に全て生まれる。だからそんなことをする必要がないんだ。
男 へえ。なんか蟻みたいだね。
女 おまえは人のことをスライムと言ったり虫と言ったり、
男 ああ、ごめん。
女 別に構わんが。

間。

女 蟻か。
男 ごめんごめん、言い方が悪かったよね。
女 いや、そうじゃない・・・私の星にもいたなと思ってな。
男 え？
女 まあ蟻と言っても、形状や質感などは地球のモノと違うが、似たようなモノだ。
男 へえ。
女 しばらく見てないがな。
男 やっぱり、君たちの星って、地球と似てるの？
女 似てる、な。大気の配分や、地表の成分などに至ってはほとんど変わらない。
男 生物が存在してる星って似てるって聞いたけど、やっぱりそうなんだね。
女 みたいだな。
男 他の星もそうなの？
女 そうなんじゃないかな。我々が移動できる範囲で現在もその環境を保持できているのは地球だけだったか。
男 そうなんだ。

女、コーヒーを飲む。

女 うむ。こっちの味の方がしっくりくるな。美味い。

男 ホント？うれしいな。地球広しと言えど、宇宙人に認められたコーヒーはこのコーヒーだけだね。

女 そんなものが嬉しいのか？

男 うん。

女 まあ、美味しいな。

少しの間。

女 静かだな。

男 うん。雨の日は出歩く人も少ないし、車の音もこの雨じゃかき消されてるから。

女 そうなのか。まあ、そのおかげであまり人に見られないですんだのだから良しとしよう。

男 そうだね。あ、音楽でも聴く？

女 音楽？

男 うん。喫茶店って、普通は音楽が流れてるもんなんだ。

女 そうなのか。

男 あいにく有線が壊れてるからラジオでだけど……。

男、ラジオをつける。

ぱらぱらと音楽がラジオから聞こえる。

女 これが音楽か。

男 君たちは聴かないの？

女 聴かないな。というか、ない。

男 もつたいない。

女 そんなにいいものなのか？

男 凄いや。生で聴くとさらに。

女 ふうん。

しばしの間、音楽に耳を傾ける。

女 楽器が鳴っているんだな。

男 うん。これはジャズだね。

女 ジャズか……。

間。

窓の外を。パトカーが通り抜ける。

女 ……。

男 どうかした？

女 いや、うん。

男 なに？

女 蟻は、何を考えて生きているんだろうな。

男 え？

女 巣を守るためか、繁栄するためか。

男 蟻はそういうの考えてないんじゃないの？本能でしょ、ああいうのって。
女 うん。そうだろうな。

男 まあ、もし何かを考えていたとしたら、怖いだろうね。

女 うん？

男 だって、まあ君たちの星はわからないけど、地球じゃ、色んな驚異にさらされてるし。

女 うん。

男 あ、

女 ……なんだ？

男 いや、昔ね、もう小さな子供のころだったんだけど、蟻が一行に並んで歩いてるのを見かけてさ。

車に轢かれた蟻の体を少しずつ運んで。何となく、蟻を一匹潰したんだ。一瞬、その蟻が居た場所には隙間ができるんだけど、すぐに後ろの蟻が詰めてきて。前の蟻がいなくなったことなんて特に気にしてなくって。

女 それがどうした？

男 それが、なんだかかわいそうだなって思ったのを、今ふと思い出したんだ。

女 そうか……残酷だな。

男 ああ、うん。大人になってから悪いことをしたと思ったよ。

女 いや、おまえの行為がというわけではない。

男 え？

間。

女 どうして喫茶店をやってるんだ？

男 え？あ、ああ。まあ好きだから、かな。

女 確証がないのか？

男 いや、ないわけじゃないんだけど。どうしてだったかな。最初はそうじゃなかったはずんだけど、なんでだったかな。はつきりとは思いつけないや。やってるうちに、好きだなんて思って、なんとなく続けているのかな。

女 恋か？

男 え？

女 好きだから、なんだろう。

男 喫茶店に恋？

男、思わず笑う。

女 何が面白かったんだ？

男 ああ、いや、そうなのかもしれない。恋みたいなものだね。流行らないのに続けるって言うのは、片思いに近いのかもしれないよね。

女 変なのか？

男 いや、変じゃないかも。てつきり恋って人にするものだと思ってたから。でも、恋って言われると、恋かも知れないね。

女 なんだかわからんが、納得できたのか。

男 うん。

女、笑う。

男・・・え？

女　なんだ？

男　今、笑った？

女　そうだ。おまえが面白かったからな。

男　・・・そっか。

女　変だったか？

男　ううん、なんだか、とつても懐かしいなって。

雨の中を飛行機が飛んでいる。

女　懐かしいか。

男　うん、なんとなくね。どうして懐かしいかすら思い出せないけど。

女　まあ、記憶なんてそんなもんだ。

男　記憶を読み取れる人にそう言われると説得力があるよ。

女、コーヒーを飲み干す。

女　ごちそうさま。だな。

男　うん。新しいの淹れる？

女　うん。お願いしよう。

男、カップを下げ、新しいコーヒーを淹れる。

女　地球は技術よりも、文化が発展しているな。

男　そう見える？

女　そのラジオだって、我々は通信手段としての無線しか使わないし、おまえたちが行う藝術、というものも我々にはない。

男　へえ。

女　昔は我々の星にもあったみたいだが、不必要と廃れていったようだ。

男　なんだか寂しいね。

女　私が生まれた頃にはすでになかったからな。どうも思わない。

男　それが普通ってことか。

女　そういうことだ。

男　でも、地球もどうなるか。

女　うん？

男　ラジオはまだあれだけど、最近では技術ばかりで、いつまでその芸術もあるかどうか。まあ、僕も芸術のことがわかってるわけじゃないけど、あったらあったでいいものだと思うんだけどな。

これでも昔は美術部だったんだよ。

女　みたいだな。

男 あ、記憶でわかるのか。

女 うん。・・・絵画か。見てみたいな。

男 時間があれば、君の似顔絵でも描いてみたいな。

女 ほう。それはぜひお願いしたいな。

窓の外をパトカーが通り過ぎて行く。

女は気がそれる。

女 さつきから多いな。パトカーと言うのだな。

男 ああ、パトカーだよ。

女 事件か。

男 さあ。最近は結構物騒だからね。

男、少し考えて、

男 あ、もしかして、

女 うん？

男 君を探してるのかも。

女 え？

男 ほう、君は宇宙からその、落ちてきたわけでしょ。

女 まあ、そうだな。

男 ほう。

女 ・・・・ん？どういうことだ。

男 だから、少なくとも気象庁、とかかな。が、それを観測してて、あの病院のあたりに隕石が落ちてきてるはずだから、それを探してるんじゃないかな。

女 なるほど。

男 大丈夫なの？

女 何がだ？

男 君が乗ってきたやつ。見つかったら大騒ぎになるよね。

女 ああ、大丈夫だ。地中深くにわからないように埋めてある。

男 おお、さすが宇宙人。

女 うん。

男 あ、だから、見つからないから、探してるのかも。

女 なるほどな。しかし、案外警察というのは頭が回らないんだな。

男 え？

女 宇宙人というのは、案外こういうところにいるものだというのに。

男、思わず笑う。

男 何それ。

女 ギャグというやつだ。

男 うん・・・面白いよ。凄く。

男、胸のあたりを押さえはじめる。

男 宇宙人でも、ギャグ言うんだね。

女 うん。地球人の真似だ。

男 短い間に上手くなったね。

女 そうか？なんだか悪い気はしないな。

男 うん。ほとんど地球人と変わらないよ。

女 そうか。ならよかった。

雨が変わらず降っている。

女、コーヒーを飲み干す。

女・・・。

男 どうしたの？

女 いや、この器の底に映っている自分の顔を見ている。

男 ああ。

女 西村さん。

男 うん。西村さん。

女 なあ、他にどうすれば地球人のように見える？

男 うーん、いや、見た目はもうほぼ地球人だし、振る舞いもそこまで変じゃないよ。

女 本当か。

男 うん。

女 しかしなかなか思うようにいかないんだ。コーヒー一杯で躓くようでは上手く地球に馴染めるかどうか。

男 別に、無理に馴染まなくていいんじゃないの？

女 そうか？

男 うん。世の中にはいくらでも変わってる人なんているし。

男、座り込む。

女 大丈夫か？

男 ああ、うん、ちよつとね。

女 心臓が悪いんだろう。無理をするなよ。

男 そっか、わかるんだよね。

女 ああ。

男・・・。

女・・・。

間。

男 ねえ、君の星のことを教えてよ。

女 え？

男 君の故郷の話でもいいや。君は地球に来てるけど、僕はほら、行けないから。

女 ああ……。

少しの間。

女 何もない星だ。文明的には発達したが、都市開発やエネルギーの資源に自然を根こそぎむさぼり、人工的な自然を生成したはいいが、そのためにまた資源を費やし、悪循環が止まらず、人工も縮小した。そんな、何もない星だ。

男 そうなんだ。

女 あまり楽しそうな話じゃなくてすまないな。

男 ううん。それで移住しようってなってるんだね。

女 まあ、そうだ。

男 そうか……。宇宙人も大変だね。

女 言っておくが、私からすればおまえも宇宙人なんだからな。

男 あ、そっか。

男、笑う。

女 おまえはよく笑うな。

男 うん。君も笑えばいいよ。

女 笑いが、よくわからないんだ。

男 さっき笑ったじゃない。あんな感じでいいんだよ。

女 何に對して笑えばいいんだ。

男 何も考えず笑うんだよ。

女 ただ笑うだけなのか？

男 うん。

女 なんだそれは。

女、笑う。

男 そう、それでいいんだよ。

女 おまえはやっぱり、変だな。

男 宇宙人に言われたくないね。

二人、笑う。

女 ……すまない。

男 え？

女 私は、嘘をついた。

男 ……なにが？

女 さっきの、移住計画の件だ。

男 どういうこと？

女 本当は、侵略を前提とした計画なんだ。

男 あ・・・そう・・・。

間。

男 え？どうして？

女 伝えるわけにはいかないじゃないか、こんなこと。

男 いや、、、そうじゃなくて。

少しの間。

男 どうしてそれを僕に？伝えるものじゃないことを、なんで？

女 なんてかな。伝えなければならぬって思ったんだ。

男 ……。

男、胸の辺りを押さえる。

女 私たちの星は、もう限界なんだ。

男 うん。

女 だから、なんとしてでも、地球に移住しなければならない。

男 うん。

女 大気の汚染度から見ても、私たちの星ほどではないが、間違いなく、同じ道を辿ろうとしている。

そうなる前に私たちが移住し、自然を保護し、なんとしてでも、我々の住める環境を作らなければならぬ。

男 うん。

女 ……すまない。

男 謝らないでよ。

女 でも、

男 仕方ないんですよ。わかるよ。

女 ……。

間。

女 わからなくなっているんだ。おまえの話を聞き、おまえを見て、それが正しいことなのかどうか。

もちろん、おまえからしたら迷惑な話だ。伝えられても困る話だ。でも、伝えなければいけないんじゃないかと思った。勝手だが、伝えなかった。

間。

女 私は、間違っているのかな。

男 さあ、僕にはわからないよ。それこそ、規模が大きすぎて。

女 そうか。

男 君がそう思うってこともわかるよ。きっとあれなんだ。

女 どういうことだ。

男 蟻だよ。

女 蟻？

男 僕は、いや、もしかしたら君もそうなのかもしれない。蟻のように代わりがいて、自分なんてちつぽけな存在で、、、そう、さっき考えてたんでしょ。

女 ……それがどうした。

男 わからないけど、君が、君であれば、何をしてもいいんじゃないかな。少なくとも僕はそう思うよ。

男、さらに苦しみ出す。

女、男の元に駆け寄る。

女 大丈夫か？

男 ああ、うん……。

女 無理をするな。

男 大丈夫だよ。

女 嘘をつくな。薬を飲め。

男 ううん、大丈夫なんだ。

女 心臓の血管が収縮してるぞ。脳に酸素が行かなくなってるだろ。

男 やっぱ君は凄いな。そんなこともわかるんだね。

女 いいから薬を飲め。

男 うん。でも、薬ももうあんまり効かなくなってるんだよね。

女 ……。

男 ほら、君と出会った場所、病院あったでしょ。あそこに通ってたんだけど、もうずっと前から覚悟しなさいって言われてさ。本当は仕事もやめなさいって言われてただけ。でも、どうせ先がないなら、お客さんが来なくても続ければいいかななんて思ってた、

女 ……。

男 僕が喫茶店を続けてた理由、やっと思ひ出したよ。なんで忘れてたんだらうな。

女 喋らない方がいいぞ。

男 でも、夢が叶ったんだ。それだけでいいや。

女 おい。

男 君に……君に飲んでもらいたかったんだ。

女 ……原田。

男 ……そうしてると、本当に西村さんみたいだ。

女 馬鹿なこと言うな。

男 ねえ、答えになるかな。

女 ……え？

男 ……最初は、本当に、気の迷いって言うか、面白かなくなって思って君を連れてきたけど、いや、初恋の人の姿になった君を見て、どこか下心もあったのかもしれない。けど、でも、連れてきて本当に良かったよ。……ありがとう。

女 ……そうか。これか。これがおまえたちにある、感情なんだな。
男 泣かないでよ。まるでお別れみたいじゃない。
女 ああ、そうだな。こういうときは笑うものなんだな。
男 そうそう。

男は苦しそうに笑う。
女は笑う。

男 君が、僕が淹れたコーヒーを飲みたいって言ったんだね。
女 そう、おまえが、原田くんが、喫茶店でバイトしてるときに、私がお店に行つて、
男 いつか、お店を作るから、来てよって言つて、
女 約束だよ、つて言った。
男 ……コーヒーは、どうだった？
女 美味しかったよ。
男 そうでしょ。

少しの間。

男 忘れないでね。
女 それはこっちの台詞。
男 僕は記憶力だけが自慢なんだよ。
女 約束忘れてたくせに。
男 ごめんごめん。
女 私も、忘れないよ。原田くん。
男 ……うん。…ああ、くそう、なんだか、情けないなあ。悔しいなあ。どうして、どうして、どうして、今になって、君と会つて、

男は、声を荒げながら、笑いながら、衰弱していく。
雨の音の中、パトカーの音が聞こえる中、ゆつくりと暗転。
長い時間が過ぎる。
ゆつくりと明かりが着くと、男が喫茶店の準備をしている。
店内にはジャズが鳴っている。
女が店に入ってくる。
顔ははつきりと見えない。

男 いらつしやいませ。
女 ……。
男 お一人ですね。お好きな席にお座りください。

女、席に座る。

男 ご注文は？…かしこまりました。

男、コーヒーを淹れる。
カップを持って移動し、それを女の前に置く。

男 お待たせしました。ブレンドのホットコーヒーです。
女 ……。

女、砂糖とミルクを適量入れ、スプーンでコーヒーをかき混ぜる。
ゆつくりと口元へ持って行き、息を吹きかけ、飲む。
そして静かに微笑む。

女 おいしい。

少しの間。

男は少し笑う。

男 でしょ。

幕。

【上演に関して】

※ 上演を希望される場合はその旨を「プロトテアトル」までご連絡ください。

※ 台詞の変更・追加・削除などは基本的に自由にしていただいて構いません。

※ 稽古場やワークショップでの使用はご連絡不要です。(でも一報いただけると喜びます…。)

【連絡先】

プロトテアトル

e-mail: prototheater@gmail.com